

1. 学校概要	
フリガナ 学校名	ツワノ チョウリキベシヨウガコウ 津和野町立木部小学校
全学級数	4学級
全児童数	26名
全教職員数	7名
活動体験の観点から見た 学校環境	(1) 県最西端に位置し、津和野町中心部から16km離れた北部高原地帯。山地に囲まれ、地域の人口は約800(300戸) (2) 住民の学校へ対する思いは強く、平素から積極的に教育活動へ支援。学校行事への参加率も高く子どもたちも地域の行事へ積極的に参加する。 (3) ふるさとの「ひと、もの、こと」を通じた学習が深められ、子どもたちは地域に愛着を持っている。 (4) 少人数であるため、学習活動で多様な意見や考え方にふれることができにくい状況にあるまた、人間関係も固定化しがちである。 (5) 学校の近くに公共施設がなく、交通も不便なため子どもたちの社会経験が乏しい。
連絡先	住 所 島根県鹿足郡津和野町中川424 電 話 番 号 0856-73-0011 FAX 番 号 0856-73-0018

2. 活動に関する学校の全体計画	
対象学年・児童数	第3学年3名、第4学年6名、第5学年3名、第6学年4名、計16名 ※本校は小規模校であることから普段より縦割り活動が主体。保護者からの要望により、1・2学年では基本的な生活習慣ができあがっていないため、対象から除外。
実施時期	平成20年9月30日(火)～10月3日(金) ※島根県教育委員会は夏季休業中の実施でも可としたが、津和野町教育委員会教育長から「年間の授業日数及び授業時間数が十分に確保されている状況であるので、夏季休業は子ども達の休みとして確保すべき」との指導により課業日中の実施とした。
活動場所	島根県隠岐郡西ノ島町・海士町
活動のねらい	(1) 平素より地域の「ひと」「もの」「こと」にふれあいながら進めている本校のふるさと教育の活動との関連を図り、体験しながら学ぶことの楽しさを味わわせる。 (2) 漁村の生活を五感を通して体験する中で、他の地域にも素晴らしい「ひと」「もの」「こと」があることに気づかせる。 (3) 漁村の伝統や文化を木部地区のものと比較しながら体験し、児童が目的意識をもった活動を行わせる。また、体験で学んだことを表現する活動を行うことにより感動を深める。 (4) 「体験活動安全計画」を作成し、児童の保健、安全について最大限の配慮と取り組みを行う。
児童一人当たりの概算費用	児童一人当たりの費用 76,090円 事業費助成(文部科学省) 75,000円 保護者負担 1,090円 ※体験メニューに食事作りを多く取り入れ、保護者負担を少しでも減らす工夫をした。

体験活動名	全活動時間 (時間)	教育課程上の位置づけ	児童の活動内容
魚の荷揚げ見学	2	総合的な学習	大敷網の荷揚げを見学し、漁協の方へのインタビューに挑戦する。
スルメづくり体験	2	総合的な学習	漁協婦人部の方の指導を受け、土産用のスルメを手作りする。
隠岐の郷土料理づくり	2	総合的な学習	隠岐の島の海産物を中心にした食材を使って、昼食づくりを行う。
海洋性スポーツ体験	4	総合的な学習	二班に分かれ、ローボートとカヌーを体験する。
海中の生物観察	1	総合的な学習	海中展望船に乗り、海中生物の様子を観察する。
サザエカレーの秘密	2	総合的な学習	隠岐名物のサザエカレーの秘密を探る。
磯釣り体験	4	総合的な学習	海岸の自然観察をしながら磯釣りを体験する。
隠岐民謡体験	1	総合的な学習	隠岐民謡「キンニャムニャ」踊りの体験をする。

3. 活動内容	
事前指導	(1) みつば会の方と料理を楽しもう～地域の食生活改善推進委員の方と木部地区の郷土料理づくりに取り組みながら、基本的な調理用具の使い方や食材の調理方法等について学んだ。 (2) Sさんから海のことを教えてもらおう～危険をとめない、特別な技術を要する海洋性スポーツの予備知識や安全確保のために必要な事柄を、学校支援委員会会長であるSさんから指導して頂いた。 (3) 隠岐チャレドン（チャレンジ＆トライの意）体験の計画を立てよう。～体験活動の全体目標を児童全員で話し合って決め、それをもとにして個々の目当てを決めた。 (4) 活動に対する事前アンケートを実施～「児童」「保護者」「職員」それぞれに対してアンケートを実施して、結果を活動内容に生かした。 ※「職員」の不安（安全確保や健康維持）と期待（人間関係の新たな発見）を洗い出した。
事後指導	(1) 体験活動のまとめをしよう～目当てをもとにした反省や、体験して新たに知ったこと、わかったこと、感じたことなどを個人、全体でまとめた。次に体験毎のグループに分かれ他の人にどのように伝え表現していくかを考え、発表の練習に取り組む。 (2) 体験活動発表会～学校行事である「木部つ子まつり」（学習発表会）の際に、体験活動でまとめたことを保護者や地域の方々の前で発表した。体験を劇にしたり、学んだ事柄を写真やV T T Rで紹介したりした。また最後に隠岐民謡を披露した。 ※児童の発信力を高めるひとつとなった。

宿泊先	
地 域 名	施 設 名
島根県隠岐郡西ノ島町	民宿「鶴陽」（2泊）
島根県隠岐郡海士町	隠岐自然村 （1泊）

日程		
1 日目 (9 月 3 0 日)	2 日目 (1 0 月 1 日)	3 日目 (1 0 月 2 日)
07:45 学校集合・出発式 08:00 学校出発 12:00 バスで昼食弁当 12:30 境港・水木しげるロード散策 14:30 フェリー乗船 17:05 隠岐西ノ島町別府港着・入島式 18:00 民宿到着・夕食・入浴 21:00 係、班別会議・反省会 21:30 消灯	06:30 起床 07:00 朝食 08:00 大敷網の見学 09:00 スルメづくり体験 11:00 郷土料理づくり・昼食 14:30 海洋性スポーツ体験 18:05 民宿着・夕食・入浴 21:00 係、班別会議・反省会 21:30 消灯	06:30 起床 07:00 朝食 08:10 民宿出発 08:30 別府港到着・フェリー乗船 08:45 海士町菱浦港着 08:50 海中展望船乗船 09:50 入島式 10:20 自然体験村到着 10:30 サザエカレーづくり 13:30 海岸の自然観察と磯釣り体験 17:30 バーベキューづくり・夕食 19:30 民謡体験「キンニャモニャ踊り」 20:40 入浴 21:40 係、班別会議・反省会 21:30 消灯
※すべての体験は、現地の指導者による指導があつ		
4 日目 (1 0 月 3 日)	5 日目 (月 日)	6 日目 (月 日)
07:00 起床 07:30 朝食 09:00 自然体験村出発 09:20 菱浦港着・離島式 09:50 フェリー乗船 13:20 境港着 13:30 境港発・バス内で昼食 18:00 学校到着		

4. 体験活動の実施体制

(1) 学校の指導(支援)体制

- (1) 少人数であることの利点を生かし、一人一人の実態に応じた細やかな実施計画を立て実施できた。
- (2) 校長が事前に現地視察を行い、現地担当者と綿密な打ち合わせを行った。

※現地視察のポイント

- ①安全確保の体制
- ②活動責任者の受け入れに対する思い。(組織としてどのように機能しているかの判断基準となる)

(2) 配慮事項等(安全確保のための改善点、衛生上の留意点等)

(1) 安全確保

- ①事前に警察署、消防署へ連絡を取り、活動地域や宿泊場所の安全確保に関する情報を収集し、安全計画作成に生かした。
- ②引率職員全員で「宿泊研修安全計画」を作成し研修した。
※時系列に各体験で想定される危険を洗い出す。→それに対するチェックポイントを表記。→体験活動中の管理の目安とした。
- ③緊急事態発生時の対処や救急連絡体制について確認した。

(2) 衛生上の留意点

- ①家庭より持参する弁当については、残飯の処理を確実に行った。
- ②夜尿症のある児童には保護者と連絡を取り、処置の仕方と指導者への連絡の仕方について事前に指導した。
- ③食物アレルギーについては事前アンケートを実施し、結果とお願いを宿泊所へ提出した。

5. 活動の成果

- (1) 漁村の体験は、他の地域の自然や伝統、文化を知るだけでなく、木部で学んできた地域の「ひと、もの、こと」の価値について改めて再認識することになった。
- (2) 活動後、高学年の児童に全校のリーダーとしての意識の高まりが顕著にみられた。体験活動実施前以上に下級生に上手に言葉かけを行い、学校全体をまとめられるようになった。
- (3) 宿泊を重ねるにつれ、児童が互いに励まし合ったり、困ったことについて助け合ったりする場面が多くみられるようになった。学年を越えた仲間意識が高揚していく様子が見られた。
- (4) 学校や家庭の色々な場面で我慢が出来なかった児童が我慢ができるようになり、成長が見られた。
- (5) 本校は小規模校で人間関係が固定化しがちであったが、体験活動を進める中で、話しづらかった児童同士で声をかけあったり、助け合ったりするなど、その関係に改善が見られるようになった。
- (6) 発表会等で学んだことを表現する活動を多く取り入れたことで、体験活動で学んだことを深めるとともに地域の方々にもその成果を伝えることができた。
- (7) 健康安全に対する十分な計画と準備、事前指導を行うことで、すべての体験活動が円滑に行われた。

6. 保護者からの声

- (1) 大変良い活動であったと思う。今後の学校生活や学習面で体験から得たものを生かしてくれるよう願っている。
- (2) 活動中に漁村の児童との交流ができればよいと思つた
- (3) 遠足でもなく、旅行でもなく、親と離れての三泊四日という長い期間の体験活動をさせていただいて、子どもたちは一生忘れることにできない思い出ができたと思う。
- (4) 向こうでの活動の様子が少しでも親に届けば待つ身も楽だと思いました。ちょっと遠くて長かったのだ。
- (5) 本校は通学合宿※を体験させて親も子も不安をあまり感じませんでしたが、経験していない親子は相当に大変だったろうと思います。何事も積み重ねが大切ですね。
- (6) 体験活動は学習に影響もないので夏休みの方がよいのではないかな。
- (7) 通学合宿と違って学級の全員が参加してできたことの意義が大きいのではないのでしょうか。

※「通学合宿」：地域の子どもを地域で育てようと8年前(平成15年)より始まった。地域のボランティアの支援で、希望する児童が木部小学校に隣接する木部公民館で4～5泊し、ここを生活拠点にして通学する。

7. 児童からの声

- (1) 自分が学べたと思ったこと
- ・台風や不漁など海で暮らす人の大変さがわかった。
 - ・ご飯をみんなで食べるときは食べる時間や片付ける人のことを考えてやるのが大切だということ。
 - ・ローボートのように一人ではできなくてもみんなで力を合わせれば楽しいことができる。
- (2) 友達と長い時間を過ごして新しく発見したことや気付いたこと
- ・みんなが色々な事をするのに学校よりも素早く動いている。
 - ・六年生がすごく助けてくれて嬉しかった。みんなで力を合わせて活動ができた。
- (3) 体験したことをもとに、これからやってみたいことはありませんか。
- ・一人でご飯を作ってみたい。お土産のスルメが喜ばれて良かった。
 - ・隠岐に流れ着いていた漂流物と石見地方のものと比べてみたい。
 - ・木部の人たちにも隠岐の自然やすごいことを教えてあげたい。
 - ・低学年の人たちがいけなくて可哀そうなので今度は全校で行ってみたい。
 - ・海洋性スポーツの楽しさをやっていない人に教えてあげたい。
- (4) 帰りのフェリーの中での日記
- ・ぼくたちは今から木部に帰ります。僕は最初、楽しい気持ちでできました。でも色々やってきて楽しいことや陰しく大変なこともありました。そういうことをやっていたら、大変なこともみんなでやれば簡単になるということも学びました。これも隠岐へ来て勉強した成果だと思います。今日までの四日間、隠岐の人や家族の人、友達、先生みんなありがとう。

8. 取り組み前の課題とその解決策

- (1) 課題
- (1) 離島での体験活動は天候の影響を受けやすく、悪天候時の活動が変更できるよう弾力的な計画を立てておく必要がある。
 - (2) 中学年児童は宿泊研修自体が初めての経験で、発達段階的な課題も多い。
 - (3) 移動に要する時間がかかるため、そのことによる児童の健康管理についての課題

(2) 上記課題に対する解決策

- (1) 事前調査の段階で、受け入れ側（西ノ島町観光課）に雨天時に可能な活動内容について準備をしていただいた。また、受け入れ諸施設や宿泊所が天候による状況変化にどの程度対応できるかを確認して、複線型の計画を立てた。
- (2) 保護者に具体的な資料をもとに、子ども達の一日の生活や活動について説明する機会を数回もった。また、地域で行われている「通学合宿」とも連携をとり、そのノウハウを生かして集団宿泊活動の指導を行った。
- (3) 陸路については緊急車両を準備して対応する。しかし、遠く離れた離島では、現地医療機関に頼らざるを得ないため、緊急時の対応計画を立て、引率者による事前研修を行った。

9. 活動地域の選定で決め手となったポイント

- (1) 本校とは全く違った自然環境、文化があること。山村に住む子ども達にとってはすべての活動素材が新鮮で、発見や驚きに満ちていた。
- (2) 県内施設でもあり、現地の町村関係の方だけでなく関係機関の協力が得やすい。
- (3) 事前視察において、担当者の方が丁寧な対応をしていただき、皆さんが歓迎の意を心温かに伝えてくれた。また、選択可能な多くの活動を準備されていた。
- (4) 受け入れの中心となる部署と人がはっきりして、責任を持って対応してくれた。

※きっかけは、島根県教育委員会から隠岐郡西ノ島町・海士町（隠岐島前子育て島協議会）の受け入れ地域情報を提供されたことによる。

10. 実施までの経過

- | | |
|-------|---|
| H20.2 | 校内職員会で「農山漁村におけるふるさと生活体験推進校」に応募することを決定。「事業計画（案）」作成 |
| 4.7 | 校内職員会において、隠岐島前子育て島協議会より送付された資料をもとに計画全般について話し合い。 |
| 5.15 | 児童、保護者、職員への事前アンケートの実施 |
| 6.10 | 計画書を教育委員会へ提出。 |
| 6.18 | 体験活動支援委員会の実施 |
| 7.12 | 現地視察 |
| 7.15 | 保護者説明会の実施 |

1. 学校概要		
フリガ 学校名	セイヨシリアカスウガッコウ 西予市立中筋小学校	
全学級数	5学級	
全児童数	44名	
全教職員数	8名	
活動体験の観点から見た 学校環境	平成22年度に開校120周年を迎えた本校は、愛媛県西予市のほぼ中央に位置し、周りを山々に囲まれている。地域は過疎化や少子高齢化が進んでいるが、教育活動にはたいへん協力的である。緑に囲まれた自然豊かな環境にありながら、児童の自然体験や勤労体験の機会は年々減ってきている。特に、海での体験活動に乏しい。	
連絡先	住 所	愛媛県西予市野村町高瀬4098
	電 話 番 号	0894(72)0807
	FAX 番 号	0894(72)3807

2. 活動に関する学校の全体計画							
対象学年・児童数	5年生 9名・6年生 6名 合計 15名						
実施時期	平成21年7月21日(火)～7月25日(土) ※課業日は授業に差し支えるため、夏休み中の実施とした。						
活動場所	愛媛県今治市(しまなみ地域)						
活動のねらい	日常生活で接することの少ない、いろいろな自然に触れたり、その中での体験や人々と交流したりする場を設定し、てきぱきとした対応をし、きちんとした言葉遣いをしなければならない状況をできる限り経験させる。そのことにより、社会人としての基礎的な資質を養い、たくましく心豊かに生きていける児童を育てる。 これを子どもたちには、 ① 感謝しよう ② 自然を大切にしよう ③ マナーを守ろう ④ 交流しよう ⑤ 食料を大切にしよう ⑥ 仲良くしよう ⑦ 進んで働こう ⑧ 感動しよう という8項目のめあてとして提示した。						
児童一人当たりの概算費用	<table border="0"> <tr> <td>児童一人当たりの費用</td> <td>51,000円</td> </tr> <tr> <td>事業費助成(文部科学省)</td> <td>43,000円</td> </tr> <tr> <td>保護者負担</td> <td>8,000円</td> </tr> </table>	児童一人当たりの費用	51,000円	事業費助成(文部科学省)	43,000円	保護者負担	8,000円
児童一人当たりの費用	51,000円						
事業費助成(文部科学省)	43,000円						
保護者負担	8,000円						

体験活動名	全活動時間 (時間)	教育課程上の位置づけ	児童の活動内容
稚魚放流体験・養殖場見学	6単位時間	社会科・学校行事(遠足・ 集団宿泊的行事)	・ ヒラメの稚魚放流 ・ ブリの養殖場見学
長期宿泊体験(含む民泊)	30単位時間	学校行事(遠足・集団宿泊 的行事)	・ サイクリング体験 ・ 海水浴 ・ 潮流体験 ・ 船釣 り体験 ・ 地曳網体験 ・ 生キャラメル作り体験 ・ 塩 作り見学 等
お年寄りとの談話室	4単位時間	総合的な学習の時間	・ 昔の生活の話 ・ しめ縄作り 等
※夏季休暇中のため、特別活動に位置付けた。			

3. 活動内容	
事前指導	長期宿泊体験に向けての準備 ・ 担当、係決め ・ 事前調査（保護者の不安、期待すること、児童の健康面等） ・ 活動準備 ・ 自己紹介カード作り（顔写真と自己紹介カードを民宿へ事前送付）
事後指導	長期宿泊体験の事後指導 ・ お礼状作り ・ アンケート ・ 発表会（参加した児童が、保護者と4年生以下の在校生に対して発表）

宿泊先	
地 域 名	施 設 名
今治市 しまなみ地域	大三島少年自然の家
今治市 しまなみ地域	しまなみの小さな家、農家民宿ベジベジ、ファーム ポーチャ西部、ファーム有津

日程		
1日目（ 7月21日）	2日目（ 7月22日）	3日目（ 7月23日）
中筋小発 多々羅キャンプ場着 テント設営 昼食 海水浴 釣り等 夕食準備 夕食 自由時間 花火大会・天体観測 班長会・係会 班会・就寝準備 就寝・消灯	起床・洗面 朝食準備 朝食 テント撤収 サイクリング （伯方島へ移動） 皆既日食観察 昼食 塩生キャラメル作り （大三島へ帰る） 受け入れ式（民泊） （2組伯方島へ移動） 夕食準備 洗濯 入浴・夕食 片付け 自由時間 就寝準備 就寝・消灯	起床・洗面 朝食準備 朝食 移動（大島へ） 舟釣り体験 11:00前後満潮 昼食 潮流体験（15:00前後最強） 移動（伯方島、大三島へ） 夕食準備 洗濯 入浴・夕食 片付け 自由時間 就寝準備 就寝・消灯
4日目（ 7月24日）	5日目（ 7月25日）	6日目（ 月 日）
起床・洗面 朝食準備 朝食 移動（大島へ） お別れ式（民泊） 地引き網体験（海水浴可） ※PTA活動の一環で、父兄も合流して一緒に体験した。 （大島へ移動） 昼食 （バーベキュー） 移動（大三島へ） 入家式・避難訓練 夕べのつどい・清掃 夕食 入浴 キャンプファイヤー 就寝準備 就寝・消灯	起床・洗面 朝のつどい・清掃 朝食 反省 退家式後出発 塩工場見学 塩工場出発 亀老山展望台 昼食 亀老山出発 中筋小学校着	

4. 体験活動の実施体制

(1) 学校の指導（支援）体制

① 校内推進体制

- 校内推進委員：校長、教頭、教務主任、研修主任、該当学年学級担任
- 留意事項
 - ・ 学校の教育活動全体で取り組む。
 - ・ 各教科等との関連を図り指導方法の工夫・改善を行う。
 - ・ 保護者や関係諸機関との連携を図る。

② 学校支援委員会

西予市立中筋小学校	校 長	西予市立中筋小学校	教 頭
西予市立中筋小学校	教務主任	西予市立中筋小学校	研修主任
西予市立中筋小学校	教 諭	西予市立中筋小学校	PTA会長 愛護会長
西予市立中筋小学校	PTA 副会長	西予市立中筋小学校	PTA 副会長
西予市立中筋小学校	PTA 委員長	中筋公民館	館 長
しまなみ農業指導班	主 任		

(2) 配慮事項等（安全確保のための改善点、衛生上の留意点等）

体験活動の内容が、1日に一つか二つのゆとりを持った計画にし、子どもたちがゆったりと、自然や人々との交流を図れるようにした。その中身は、できるだけ、家族だけでは普段できない海での活動を多く取り入れ、いろいろな自然や人々の生き方に触れるようにした。また、4軒に分けた民泊を2日間取り入れ、朝晩2日間の計4回の食事のうち1回だけ様子を見るために訪問する（1軒に1回は訪問し、教員も一緒に食事することとし、極力、子どもたちだけで民家の方々との交流を図るようにした。その間指導者は、電話連絡で様子をうかがい、緊急事態に対応できるよう車を用意していた。

5. 活動の成果

- (1) 校長が以前勤めていた学校の関係者の協力で、ヒラメの稚魚放流を体験できたことが、漁船に乗ったことのない児童にとっては、事前にはいい体験になった。
- (2) 校長※が窓口になり、西予市教育委員会や教育事務所、そして、しまなみ地域の担当者との連絡・調整をしたことは、職員数が少ない学校にとっては、担任の授業や空き時間を気にすることがなかった。
- (3) 4日目の地引き網体験活動では、子どもだけでは人数が足りず、PTAの研修活動として保護者にも参加を呼びかけ、多くの保護者が参加したことは、4日目の子どもの様子を見ることができ安心感を与えたとともに、家族の交流が深められ、たいへん有意義であった。
- (4) 現地研修を2回行い、実際に自転車に乗ったり4軒の民家を訪ねたり、子どもたちの写真と手紙を送ったりしたことにより、スムーズに体験活動を行うことができた。

※小規模校であるからこそ、校長が対応可能。授業をもたないため、一般教諭と比較して作業を進める時間が取りやすい。

6. 保護者からの声

この体験活動を実施するに当たって、成果がすぐに現れることは期待していなかったが、活動後にアンケートをとったところ、保護者から次のような意見が寄せられた。

- ①手伝いをよくするようになった。 ②用事を頼んでもいいやいやすくなった。 ③「ありがとう」ということをよく言うようになった。
- ④自分のことを自ら進んですることが多くなった。

7. 児童からの声

子どもたちからは、8つのねらい（①感謝しよう②自然を大切にしよう③マナーを守ろう④交流しよう⑤食料を大切にしよう⑥仲良くしよう⑦進んで働こう⑧感動しよう）が十分達成できたという結果が得られた。

8. 取り組み前の課題とその解決策

(1) 課題

- ①長期宿泊になると、児童だけでなく引率者の負担も大きくなる。特に、小さい子どもがいる引率者や、女性の引率者については、家庭のことがあり、役割分担等を含めた引率計画の工夫が重要である。
民泊を何日目にするかにより引率者が必要かどうかに関係してくるので、体験活動の内容と合わせて考慮する必要がある。
- ②子どもが民泊をしている間、引率者がどのように過ごし、どのように関わるかも工夫が必要である。

(2) 上記課題に対する解決策

- ①課題を解決するには、職員の理解と民泊を中日に計画するといえるように感じる。
※民泊中は児童を民宿に預けることで、特に女性教員は必要がない。女性教員は合同宿泊中に配置できるように、民泊を2泊目と3泊目に計画することで解決できた。5日間通しては校長と男性教員で対応した。
- ②PTAの研修活動として保護者にも参加を呼びかけ、保護者に参加していただいたことは、4日目の子どもの様子を見ることができ安心感を与えるとともに、兄弟を含め、交流が深められ、たいへん有意義であった。

9. 活動地域の選定で決め手となったポイント

山に囲まれた農山村で生活している児童にとって、海と島々で構成されたしまなみ地域で民泊を含む長期宿泊体験をすることは、日ごろ接することのない、自然（サイクリング、海水浴、潮流体験、日食観察、塩工場見学等）や人々の暮らし、産業（舟釣り体験、地引き網体験等）に接することができ、豊かな人間性を養うのに大変有効に働くと考え、当該宿泊先を選定した。

※愛媛県教育委員会は、受入地域情報として、本校に対し県内の西条、内子、しまなみの3地域を紹介した。その中でも上記の条件とともに受入先の規模がマッチしたことから、しまなみ地区に決定した経緯がある。

10. 実施までの経過

- 平成21. 2 西予市教育委員会より、「豊かな体験活動推進事業」の打診があった。
- 3 教職員と協議のうえ、「豊かな体験活動推進事業」の実施を決定。
- 4 文部科学省より「豊かな体験活動推進事業」の内定通知を受理。
PTA総会で「豊かな体験活動推進事業」の概要について説明。
- 5 校長による現地下見を実施。
- 6 校長ならびに引率教員で現地下見を実施。
- 7 保護者説明会で最終説明。

1. 学校概要		
フリガナ 学校名	カスガ シリウ シロウズシヨウガッコウ 春日市立 白水小学校	
全学級数	20学級（特別支援学級1学級を含む）	
全児童数	646名（実施当時）	
全教職員数	26名（実施当時）	
活動体験の観点から見た 学校環境	○春日市は、福岡都市圏の住宅都市として急速に発展し、人口約11万人の小都市を形成している。 ○市内に点在する文化遺産や溜池などの水や緑の自然を生かしながら、都市計画が進んでいる。 ○校区のほとんどが住宅地であり、農業体験等、自然とふれあう体験を行う機会は少ない。 ○開校当初（平成18年度）からコミュニティ・スクールの指定を受け、地域と一体となった教育活動を展開するなど、新しいタイプの学校や地域づくりを進めている。	
連絡先	住 所	福岡県 春日市 白水ヶ丘1丁目100番地
	電 話 番 号	092-915-2525
	FAX 番 号	092-915-2511

2. 活動に関する学校の全体計画	
対象学年・児童数	第5学年 91名
実施時期	平成21年7月10日（金）～12日（日）
活動場所	長崎県杵岐市
活動のねらい	(1) 杵岐の「ひと・もの・こと」に自ら働きかけ、人から温かさを感じたり、自然のすばらしさに気づいたりして、体験の喜びや充実感を味わう。 (2) 漁家民宿に滞在し、豊かな自然の中で多くの体験を重ねたり、自分たちで家事全般をしたりして、自分たちのこと自分でやり遂げるたくましさをも身につける。 (3) 地域の方との交流活動を通して、コミュニケーション能力の向上を図る。
児童一人当たりの概算費用	児童一人当たりの費用 23,500円 事業費助成（文部科学省） 15,200円 保護者負担 8,300円

体験活動名	全活動時間 (時間)	教育課程上の位置づけ	児童の活動内容
塩作り体験	2	理科	郷ノ浦町ツインズビーチ体験館にて、80パーセントの濃縮海水を鍋にかけ、水分を蒸発させていく塩作り体験を行った。
イカの一晩干し作り	1	家庭科	指導者に手伝ってもらいながら、イカの内臓や目を取り出し、イカの皮をはぐ体験を行った。
魚釣り体験	2	総合的な学習の時間	2ヶ所に分かれ、ジャケットを着て、釣り体験を行った。
ビーチコーミング	1	総合的な学習の時間	海岸の清掃活動を行った。
豆腐作り体験	2	家庭科	大豆を粗挽きし、ミキサーですりつぶして絞る。その後、豆乳を焦げ付かないように混ぜる…と進め、豆腐作りを行った。

3. 活動内容

事前指導	(1) 春日市の環境と壱岐市の環境等の違いに気づかせる。 子どもたちの生活と壱岐での生活や、春日市の環境と壱岐市の環境などの違いを意識するように事前指導を行った。そのためには、今の自分たちの生活や春日市の環境について再度触れる機会を持つようにした。 (2) 共同生活をする上でのルールやマナーを指導しておく。 親元を離れての二泊三日の共同生活を初めて経験する児童がほとんどであり、共同生活のルールやマナーについて学校で指導した。
事後指導	(1) ホームステイ先へ感謝やお礼の手紙を書き、送付した。 (2) 体験活動の学びを生活へ生かすようにした。 子どもたちは、体験したことを言語化したり映像化したりと記憶を残すような指導を行った。このことは、7つの宿泊所に分かれて宿泊していた子どもたちが、それぞれの宿泊所で何をしていたのかを知るために交流が生まれ、新しい友達のよさを知ったり、出来る自分に自信をもたてることができた。 (3) 体験活動の学びを学習に生かした。 ○体験したことを作文にまとめ、地域・保護者に発表する活動（国語科） ○体験したことを絵に表す活動（図工） ○日本の漁業のまとめを行う。（社会科）

宿泊先

地 域 名	施 設 名
郷ノ浦町片原触	民宿 滝の上
郷ノ浦町渡良西触	ペンション倭寇
郷ノ浦町渡良浦	民宿 船場荘
石田町筒城東	民宿 近海荘, 民宿 ひとみ
石田町南触	民宿 福川荘

日程

1日目（7月10日）	2日目（7月11日）	3日目（7月12日）
07:45 学校・出発式 08:20 学校出発 12:20～入島式 12:40～昼食 13:50～塩作り体験 16:30～各民宿に移動し、各民宿での活動 （夕食準備、夕食、後片付け、入浴、1日目の振り返りなど） 就寝	起床、朝食準備、朝食、後片付け 08:30 イルカパーク集合 ローテーションプログラム（イカ の一夜干し作り、イルカのショーの 見学） 11:30 昼食、海辺の散策 13:00 魚釣り体験 15:30 民宿へ移動し、各民宿での活動 （釣った魚の調理、夕食、後片付け、 入浴、2日目の振り返りなど） 就寝	起床、朝食準備、朝食、後片付け 08:00 ビーチコーミング 09:30 豆腐作り体験 11:30 ビーチ散策と昼食 12:30 離島式 13:20 フェリー出発 16:45 学校到着 到着式
4日目（月 日）	5日目（月 日）	6日目（月 日）

4. 体験活動の実施体制

(1) 学校の指導(支援)体制

(1) 支援体制について

農山漁村での体験学習を推進している株式会社農協観光の協力も得ながら、活動の充実・推進を図るようにした。また、「おやじの会」(有志の父親の集まり)に声をかけるとともに、開催期日を金・土・日と休日を入れることによって、参加体制がとれるように配慮した。

(2) 教師の関わり方について

教師は、児童との距離を取り、児童が自らひと・もの・ことと積極的に関わりを持つよう指導した。今回の体験活動では、二泊三日の間に教師が直接指導した場面は、行き帰りの交通機関の中だけであり、港に船が着き、民宿の方々が子どもたちをそれぞれ連れて行かれてからは、教師の直接指導を極力避けた。子どもたちだけの力で共同生活を送る中で、初めて自分を試したり、友達と力を合わせたりする必然が生まれるからである。また、困ったときに教師の手助けは無いわけである。そこで、何事にも「ひと・もの・こと」に積極的に関わることを通して、コミュニケーション能力を高められるようにした。

(2) 配慮事項等(安全確保のための改善点、衛生上の留意点等)

安全確保

(1) 現地踏査の実施

6月13日(土)～14日(日)に、教頭、5年生担任(3名)が現地踏査に行き、事前打ち合わせをもとに、宿泊先、活動場所などの現地調査、緊急医療機関等の受け入れ体制の確認、保護者説明会に向けた資料収集等を行った。

(2) 保護者説明会における受け入れ側からの説明

保護者説明会に、老岐市の観光商工課の方々に参加してもらい、市長のメッセージの紹介や受入体制等の話をして頂くとともに、保護者からの質問に答えてもらうようにしたので、保護者の不安を解消することにつながったのではないかと考える。

衛生上の留意点

(1) 児童の健康状況調査の実施

事前に児童の健康状況調査を行い、食物アレルギー等についての把握を行い、受入施設との連絡調整を行った。

5. 活動の成果

(1) 二泊三日の体験活動を通して、食事の準備や後片付けなど日常的な体験を改めて行い、自宅へ戻ってからも、体験活動で身につけた経験を、実践化している児童が増えた。

(2) 二泊三日の体験活動を通して、新たな人間関係の拡がりやこれまでの人間関係の深まりが強くなり、各学級の凝集性を高めることができた。

6. 保護者からの声

(1) 離島式では泣いたということで、よほど、老岐のお父さん、お母さんとの別れが名残惜しかったのだと思った。

(2) 帰ってきてからは、よく動いて手伝いをしてくれるようになった。

(3) 楽しそうに、魚釣り、塩作り、豆腐作り、海岸でゴミ拾いをしたことなど、いろいろな体験をしたことを話してくれました。普通では体験できない本当に貴重な時間を、ありがたく思っています。

(4) みんなで協力したこと、学んだことを忘れずに、この先、成長していつてほしいと思います。

(5) 老岐での話をいろいろと聞いて、本当にいろんな貴重な体験をさせていただいたんだなと思いました。民宿の方々と別れる時には、人前で泣いたことのない子が涙が止まらなかったと言っていました。「お金を貯めて、民宿に行く！」と約束したそうです。民宿の方々は大変温かい方で、とてもよくして頂き、たくさんのことを学んで帰ってきたと思います。本当にありがとうございました。

7. 児童からの声

体験活動の評価については、自由記述式、及び評定尺度によりアンケートを実施した。自由記述では、どの記述からも、体験活動を通して、「食事の準備や後片付けを行う中で、いつも母親に準備から後片付けまでやってもらっていることに感謝しなければ・・・」という感想や「また、お母さんのに会いに行きたい」という感想など、体験活動が自己を振り返るきっかけになったことを示すものが大変多かった。

そして、自由記述の内容を分類すると、主な内容は「友達」「話し合い」「健康」「貢献」「規範」の5つにわけられ、その中でも「友達」についての自由記述が30%を示していた。これは、「友達」との関わりが深まったことを示すものと考えられる。

また、「体験で身につけたことを、今でも続けていますか？」の質問について、自由記述式で回答を求めたところ、食事の準備や後片付けというお手伝いや地域の人へのあいさつなど礼儀に関わる記述を、60%の児童から得ることができた。

さらに、5つの体験活動について、5段階の尺度で、それぞれの体験の満足度を尋ねたところ、平均値で4.75という大変高い結果を示した。これは、どの体験活動も子どもたちにとって新鮮であったことが、高い満足感につながったと考えられる。

8. 取り組み前の課題とその解決策

(1) 課題

児童並びに保護者にとって大変価値が高い体験活動であるが、次年度からは国や県、市からの補助がなく保護者負担が増えるため、実施することができず、毎年、継続して実施できない。(事業の継続性の課題)

(2) 上記課題に対する解決策

例えば、学校としては、修学旅行や社会科見学など、保護者に金銭の負担が生じる行事の内容等を見直して金銭の負担を減らし、このような事業を行っても、6年間トータルで保護者が負担する金額があまり増えないようにする策が考えられるが、やはり助成がないと、保護者には金銭的負担が多すぎると考える。基本的には、複数年(3～5年くらいは)継続して実施できるように、助成を行ってほしい。

9. 活動地域の選定で決め手となったポイント

- (1) 体験活動の内容、種類(子どもが興味のある体験ができる。一人一人が十分に体験できる)
- (2) 受入体制の充実度(安心して児童を任せられることができる)
- (3) 学校からの移動時間(児童に加重負担をかけることなく移動できる)

10. 実施までの経過

- (1) 老岐市観光商工課との事前打ち合わせ
期 日：平成21年6月8日(月) 17:00～
参加者：老岐市観光商工課員 農協観光事業課長
校長、5年生担任(3名)
内 容：○2泊3日の具体的な日程
○活動の場所や留意点の確認
○受入体制や民宿に関する内容 等
- (2) 現地踏査
期 日：平成21年6月13日(土)～14日(日)
参加者：教頭、5年生担任(3名)
内 容：○事前打ち合わせをもとに、宿泊先、活動場所などの現地調査
○緊急医療機関等の受け入れ体制の確認
○保護者説明会に向けた資料収集 等
- (2) 保護者説明会
期 日：平成21年6月18日(木) 19:00～
参加者：《学 校》校長、教頭、教務主任、5年生担任(3名)
《保護者》80名(91名中)
《老岐市》観光商工課課長、観光商工課課員